折り紙と幼児教育

― 附属幼稚園の指導をとおして ―

Origami and Preschool Education:

Through Teaching Origami in the Affiliate Kindergarten

岩　瀬　敏　子
Toshiko IWASE

中　山　千　章
Chiaki NAKAYAMA

Ⅰ　はじめに

保育園や幼稚園の実習において，本学保育科の学生たちは実習に行く前に，子どもたちと室内で遊ぶには，どんなことをすればいいのかと訊いてくることが多い。とくに１年生は入学して学生生活にもまだあまり慣れていない６月に，最初の実習である幼稚園に観察実習として12日間行くことになるので，緊張感とともに不安感が募るのであろう。

室内の遊びというと，どうしても走ったり跳んだりといった運動系の遊びは無理であるので，必然的に静的な遊びになる。静的な遊びというと，イメージ的には手遊び・指遊びや折り紙，紙芝居や絵本を読むことなどが挙げられる。また，準備を必要とするので，必ずしも簡単な室内遊びとはいえないが，パネルシアターやエプロンシアター，ペープサート，工作などもある。

ここでは，実習の部分的指導として，紙芝居や絵本の読み聞かせのように子どもたちがどちらかというと受身で楽しむ遊びではなく，また，手遊びのように歌やリズム感を必要とする遊びでもない折り紙について論じることにする。折り紙は伝承遊びでもあるので，両親や祖父，祖母なども鶴をはじめとし，いろいろな種類の折り方を知っている可能性が大であるし，祖母などと一緒に折り紙で遊べば，それだけでコミュニケーションがより発展するのは間違いないであろう。折り紙の利便性は紙さえあれば何時でもどこでも，少しの時間しかない場合でも，子どもの数の多少にかかわらず，誰もが楽しく遊べるという点にある。

さらに，折り紙は他の遊びとは違い子どもたちが自ら主体的に取り組むことのできる遊びでもある。子どもたちにとっても，実習生にとっても折るのが上手とはいえないまでも，昔から続いている日本の伝統的な遊びでもあるし，日常的な遊びでもあるので，当然のことながら，折り紙で遊んだ経験はあるであろう。

幼稚園･保育園等の保育テーマとしても，折り紙は格好の題材である。なにしろ，机に向かっての作業となるので，心を落ち着けて静かに，集中して取り組むことへの習慣づけになる。実際に折り方を教えるにあたっては，一つひとつの手順を教えながら，一緒に折っていくわけであるから，子どもたちも熱心に先生の話を聞くようになる。さらに，どのように折ればいいのかをじっくり考えたり，確認したりしながら取り組むようになるので，子どもたちの思考力や忍耐力も自然と高まることになる。

さらに，子どもたちは自分の好きな折り紙の折り方を覚えると，楽しくなって自ら進んで折ろうとするし，作品ができあがると認めてもらいたいという気持ちが高ぶり，先生や家族の人たちにも見せようとするので，コミュニケーションも自然と弾んでくる。子どもは作品を作る喜びを感じるとともに折ることのできるものが増えてくる楽しみを味わいながら，観察することやきちんと聴くこと，理解力や記憶力を高めていく。

Ⅱ　目的及び方法について

折り紙はフレーベルの第18恩物（恩物は関信三の訳で教育遊具のこと）として，日本で最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（明治９年設立）の時代から手技の教材として取り入れられていた。もっとも当時は折り紙という言葉は使われてなく「摺紙（しょうし)」とか「紙たたみ」という訳があてられていた。手技とは明治時代に書かれた『保育法』によると「幼稚園恩物を用いて目及び手を練習し心意の発育に資せんことを要す」とのことであり，折り紙は目と手のコーディネーションを育む訓練に用いられていたことが分かる。フレーベルの教育論を規範とした日本の幼稚園では，初めから恩物を幼稚園に備える必要な教具の一つとしていたのである。

ここでは，保育の教材として折り紙を現代の幼児教育の観点からの考察と，折り紙の指導において，現場の教師がどのような考えや目的をもって折り紙を取り入れているのかを研究する。

折り紙の指導のあり方の研究については，本学の附属幼稚園の教師に依頼し，質問紙による調査方法をとった。有効回答数は７であった。なお，質問項目は次の７つである。

①折り紙を指導するクラス及び月の頻度について

②どんな作品を折るかについて

③折ることのできるのは何種類位なのか

④折り紙のサイズについて

⑤指導方法と折りかたの注意事項について

⑥折り紙を幼児教育に取り入れる目的について

⑦その他（興味･関心を引く話など）について

Ⅲ　幼児教育と折り紙について

日本の幼稚園教育は初めから，フレーベルから直接教授を受けた松野クララが東京女子師範学校附属幼稚園の首席保母として着任し，恩物などを教材として用いた保育方法であり，フレーベルの幼児教育を踏襲したものであった。では，フレーベルの幼児教育とはどんなものであろうか。少し長いが，『保育法』の記述によると，「自然が教えるところに従いて身体の運動によりて幼児を発達せしむべきことを説き，幼児固有の活動の欲望は自ら遊嬉によりて顕れ又其の共同遊嬉を愛するによりて観ることを得べしとなし，遂に幼児自然の傾向たる活動を組織的運動に導きたるは是れ幼稚園教育の発明というべし。遊嬉は則ち幼児心身の多方の活動を奨励し又之を増進するものなるが故に幼稚園教育は一に遊嬉に依るべきなり」とのことである。

「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の答申として，中央教育審議会は次のように述べている。「幼児は，遊びの中で主体的に対象にかかわり，自己を表出する。そこから，外の世界に対する好奇心が育まれ，探索し，知識を蓄えるための基礎が形成される。また，ものや人とのかかわりにおける自己表出を通して，幼児の発達にとって最も重要

な自我が芽生えるとともに，人とかかわる力や他人の存在に気付くなど，自己を取り巻く社会への感覚を養っている」そして，「このような幼児期の発達の特性に照らして，幼稚園では，幼児が自由に遊ぶのに任せるのではなく，教員が計画的に幼児の遊びを十分に確保しながら，生涯にわたる人間形成の基礎を培う教育を行っている」。さらに，保育所保育指針には，保育の方法として，「子どもが自発的，意欲的に関われるような環境を構成し，子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に，乳幼児期にふさわしい体験が得られるように，生活や遊びを通して総合的に保育すること」と記してある。

言葉の表現は現在と明治時代では当然違ってくるが，内容的には酷似している。どちらも遊びがもっとも重要であることや，遊びのなかから自己の欲望が表れること，他人に働きかける活動が現れ共同で遊ぶこと，心身の活動が多方面にわたり活発になることなどを挙げている。

フレーベルはまた子どもの教育遊具として恩物を創造した。恩物は子どもが夢中になって遊んでいる中で想像・創作活動を自然と引き出すための教材であり，想像力や観念力，集中力，情緒の安定，美的感覚などが養われるという。第18番恩物の紙たたみは折り紙のことであり，日本では最初の東京女子師範学校附属幼稚園の設立と同時に重要な教材として取り入れられた経緯がある。

折り紙は日本の幼児教育においては最初から重要な一端を担っており，現在の幼児教育にも通じているので，保育園･幼稚園での折り紙の活動（子どもたちと一緒に折り紙で遊ぶ一連のプロセス）は幼稚園の教育の在り方にも保育所の保育の趣旨にも十分に適っているといえる。

Ⅳ　折り紙の効用について

子どもたちは好奇心のかたまりである。何にでも興味を示し，なんでも手に取り，理解しようとする。何かを制作することは，何かを工夫しながら発見するプロセスでもあり，本能的に好きといえる。折り紙を折る楽しさは，そのような習性を備えた子どもの好奇心を育み，探究心を高めながら，イメージした形が一連の行為のなかで手の中にできあがっていくことにある。

折り紙を折る楽しさは単に制作することだけにあるのではなく，その過程にもある。子どもたちは作品のイメージを膨らませ，上手に折ろうと，手順を考えたり，折り方を工夫したりしながら主体的に取り組むことによって折り方を覚えていくところに楽しみが生まれる。実際には先生の真似をすることだけかもしれないが，真似ることは学ぶことでもあるし，オリジナリティーを生み出す力にもなる。

子どもたちにとっては折り紙は自発的に関わる遊びでもあるし，話をしっかりと聞くとともに深く考え，心を落ち着かせ，静かに指先に神経を集中させる（忍耐心を養う）作業でもある。また，折り方を友達同士が教えあうコミュニケーションの場でもあるし，お互いの作品を評価したりする意見交換の場ともなる。

折り紙を環境的に捉えてみると，折り紙用紙はどこにでも売られているし，いろいろな大きさや色のものもある。またユニークなデザインを選ぶなら身の回りのラッピングペーパーや新聞のチラシなどで折ってみるのも一興であろう。子どもの生活や遊びのひとつとして積極的に取り入れようとするなら，どこの家庭にもある，包装紙や綺麗な折りこみを利用するのも面白い。いつでもどこでも準備が容易にでき，すぐに遊べるので，子どもと一緒に楽しむには最適な遊びのひとつともいえる。

子どもは折り紙が折れるようになると，家にいるときは家族の前でも折りたくなるだろうし，試行錯誤しながら折る中で，折り紙を媒介にしたコミュニケーションも大いに弾み，ますます興味･関心が高まり，それとともに「もっと上手に折りたい」とか「もっと詳しく知りたい」とかの意欲がわいてくるし，生きる力の基礎を培うことにもなる。

折り紙遊びで育まれる力として，折り紙作家の山口は①集中力，②理解力，③創造力や想像力，④手先の操作力の４つを挙げ，それぞれ次のように述べている。最初の集中力については，子どもは好きな作品は夢中になって折るので，その過程で確実に集中力を育むようになる。また理解力については，本の読み聞かせと同様で，折り紙も子どもに手本を示しながら言葉で折り方を教えることで，人の話をしっかり聞いて理解する力がつくようになる。創造力や想像力に関しては，子どもは折ったものを何かに見立てるのが得意だとして，次のように述べている。子どもは，ただ三角に折ったものでも飛行機にしたりおにぎりにしたりと何かに見立てるのが得意であるので，「おにぎりの中には何が入っているのかな」など見立てを広げるような声掛けをしながら，創造力や想像力を伸ばしてあげたいという。さらに，手先の操作力については，子どもが作品を作ったら，「じょうずに作れたね」と褒めたり，作品を飾るようにしてあげることの大切さについて言及している。そうすることにより子どもは嬉しくなり，次々と作品を折るようになる。そうして折り紙で遊んでいるうちに手先も自然と器用になるとのことである。

他にも，折り紙の効用として一般的に次のようなことがいわれている。手先，指先の働きは脳によい刺激を与え，それは脳の発達を促す。手は第二の脳ともいわれているが，指先の話になると，ペンフィールドの手や口，舌が奇妙に大きい運動野の脳地図を思い出す。本当に脳が発達するかどうかはよくわからないが，手先の巧緻性やイメージする能力が高まることは確かであろう。さらに，自発性や努力する心が養われることや色彩感覚が高まること，物の形を正確に捉えるようになること，物事には順序があることを知るようになるといえるであろう。

Ⅴ　幼稚園での折り紙の指導について

初めに附属幼稚園では折り紙の指導は保育のなかに取り入れられているのかどうか，取り入れられているとしたらどのクラス（年少，年中，年長）で取り入れられているのか，そして作品としてはどのようなものを折っているのかを調べた。

指導は年少から年長クラスに至るまで，どのクラスでも行われていたが，指導の頻度はどのクラスにおいても月に１回のペースで進められていた。ただ，年少の１クラスだけは月に１回～３回ほどという回答であって，それほど多くはなかった。そのためか，作品はチューリップやこいのぼり，カタツムリ，おりひめ，ひこぼしなど季節にあわせて制作するものが多く，幼稚園の月毎の行事スケジュールにしたがって折り紙指導も行われている様子が作品からも窺われる。この傾向は年少から年長クラスまでほぼ同様であった。ただし，制作する作品の種類の数は年中から年長クラスになるに従って，やはりというべきか，多くなってくる。

折り紙を折ることのできる種類については，年少クラスで多い子は10種類ほどであった。年中クラスにおいては10種類以上は折れるということだが，実際には確認をしたことがないのであくまで推測とのことである。年長クラスでは多く折れる子は15種類ぐらいで，少ない子は５種類ぐらいしか折れないそうである。ただ，年長の子どもたちは，種類としては毎月２種類ほど折っているので，毎回の行事や月毎の制作を合計すると，年間では36種類以上は折っていることになるそうである。ただし，幼稚園で折っているときは，教師が指導した作品の折りかたは覚えているのだが，家に帰ってから，ひとりで折るとなると，できなくなる子が結構多いとのことである。

折ることのできる種類の数は，理解力や能力の差が子どもによりそれぞれで，たくさん折れる子も，折れない子もいるので，一概的に何作品ぐらい折れるかということは難しいとのことである。ただし，家庭環境が大きく影響していると考えられるのだが，母親や祖母と一緒に折り紙遊びを楽しんでいる子は折ることのできる種類が多いという。

折り紙を指導するうえで，大変なことは，子どもたちの間で理解力にそれぞれ差があるので，早い子はどんどん先に進んでしまい，終わるのも早くなるので，どうしても飽きがきて騒いでしまうなど，時間をもてあそぶようになるが，折り紙が苦手な子は教師の手助けがどうしても必要になり，時間もかかるので，クラス全体を上手にコントロールすることが難しいという。

指導のときに使用する折り紙の用紙サイズについての質問には，年少クラスの子供たちは大判（25cm角か30cm角）を使うとのことであった。年中クラスにおいては，年度初めの４月頃は年少クラスと同じく大判サイズを使うが，それ以後は普通サイズ（15cm角）を使うとのことであり，年長クラスでは最初から普通サイズを使用するそうである。

年少（３歳児）クラスの子供においては手の巧緻性が十分に育っていないので，もっともこの頃から指をたくさん使うようになり器用さが身についてくるのだが，折り紙を上手に折ることはできないし，角と角をあわせるのも大変なので，折るのを容易にするために大判の折り紙を使用することになる。年中や年長児になると指先を器用にコントロールできるようになるので，普通サイズで間に合うのであろう。

３歳児用の折り紙の本に『３歳からのはじめての折り紙遊び』というのがあるが，そのなかで，はじめて折り紙をする子は「まっすぐに折る」ことは結構むずかしく最初のうちはどうしてもく

しゃくしゃになってしまう。けれど，それを「失敗」といわないで子どもと一緒に「できたね」といって喜ぼうなどと指導上のヒントが記されている。またこの本の特徴として，「山折と谷折だけでＯＫ」と表紙に書かれている。３歳の子どもにはおそらく他の折り方を用いての作業は難しいのかもしれない。

折り紙の指導方法と折りかたの注意事項について，年少クラスでは折り紙をするにあたって，子どもたちにわかりやすい言葉で話すことや，話をしっかり聞くこと，間違えないように取り組もうとする気持ちを持たせることなどを挙げた。それとともに，折りかたについては，折り紙の角と角とをしっかり合わせ，よくアイロンをかけきちんと折目をつけるなど，折りかたの基本を指導することが大切であるとのことである。年中クラスにおいては，難易度の高い作品も折るようになるので，どのように説明したら全員が理解できるようになるのか，ということを特に留意するという。何度も失敗し，理解力に欠ける子どもへはどういう声かけをしたらいいのか，どのように配慮･援助すべきかなど考えることが多いという。折りかたが難しい作品を折る場合には指導用に使う用紙は，子どもたちが使っている折り紙の４倍サイズを使って説明するとのことであった。

年長クラスにおいても，折りかたの指導についてはほぼ年少･年中クラスと同様で個々の子どもたちの理解力がそれぞれなので上手に折れない子への声かけの工夫や，達成感を味合わせるため，最後まで自分で折れるようにする指導の進め方や配慮の仕方などが難しいという。

折り紙を幼児教育に取り入れる目的について，年少クラスの回答は，子どもたちが折り紙遊びで指先を使うことにより，知能の発達が促されるばかりでなく，集中して考えながら取り組むことによって作品が完成し，喜びと同時に達成感を味わえるなどを挙げている。年中クラスにおいては折り紙をとおして，分からないところなどは，お互いに教えあったりするのでコミュニケーションの発展とともに友達の輪が広がること，手先が器用になること，それとともにきれいに折ろうとする気持ちが自然と芽生えてくるなどであった。年長クラスにおいては，折り紙を通して季節の草花や生き物，食べ物を知ることができるし，集中力も持続しやすくなるからとのことである。それとともに，色彩を楽しみ，想像性･創造性を養い，考える力を培い，達成感を味わい，意欲につなげていくのが折り紙をする重要なねらいであるとのことであった。

年少から年長クラスを通して，日本の伝承遊びのひとつでもある折り紙は，一枚の平面よりいろいろな形に変化させることができ，立体的にも折ることができ，また失敗しても何度でもやり直しができるので，子どもたちはイメージを拡張させ，考えながら折った作品にユニークな解釈をしたり，表現したりすることができる創造性豊かなすばらしい教育素材であるとのことである。

Ⅵ　実習でする折り紙

折り紙は学生にとって身近な遊びでもあるし，授業でも行っている。また多くの保育･幼稚園で

も取り入れられており，紙一枚で簡単にできるので，実習で折り紙を子どもたちに指導しようとする学生が少なからずいる。しかしながら，実際に指導すると，子どもたち一人ひとりの能力差が大きく，みんなが同じペースで折ることができないので，部分実習は失敗だったという話をよく聞く。

折れない子に配慮し声かけをしながら手伝っていると，他の子どもたちへの説明が上手にできなくなり，落ち着きがなくなり騒ぎはじめる子どももでてき，予定の時間配分もずれて結局は失敗してしまうのだそうだ。折り紙のように，個々の子どもたちの能力が要求され，指導するにもある程度の時間が必要となると，保育でよくいわれる全体への「気配り」「目配り」を忘れないようにするだけでは済む問題ではないようである。

折り紙の保育技術としては，ひとえに折り方をどのように説明すればいいのか，子どもにも分かりやすい言葉をつかって，タイミングよく言葉かけをできるようにするのが大切である。それには前もって説明方法や言葉かけをどんなふうにするのがいいのかをよく考えながら何度も自分で折ってみて，実習のデモンストレーションをする必要がある。

他にも，発達段階を考慮してどんな作品を折るのかを考えておく必要がある。3歳児は折り紙は初めての経験である子どもが多いので，とにかく親しみを持たせるようにすることが大事である。折るにあたっては指先の力もあまりないし，器用さも発達していないので，折りすじが残るように何度もアイロンをかけさせるのもいいのかもしれない。とにかく角がずれてしまって上手く折れなくても，最後まで頑張って作品を仕上げ，達成感を味わってもらうようにする。年中クラスでは，作品への想像力も発達してきており，色に対しての好みも子どもたちそれぞれなので，好きな色を選ばせるようにする。自分の好きな色を慎重に選択する姿に，取り組みへの意欲がみられるとのことである。折りかたの指導としては山折り，谷折りなど折り紙の基本をしっかりできるようにすることが大切であるとのことである。作品の出来栄えを気にするような年齢になっているので，折り紙を楽しむだけでなく，上手に折れるようにすることも大事であるとのことである。上手に折れないと悔しがったりするし，上手く折れると自己肯定感や満足感が高まる年頃でもあるからである。年長クラスにおいては，基本的に年中クラスと同じであるが，指先の巧緻性や想像力･創造力も高まってきており，チャレンジ精神旺盛になっているので，作るのが難しく，時間もかかるような作品に取り組む子もいるし，実際大人でも驚くような作品を作る子もでてくる。ただし，個人差がますます大きくなってきているので，一斉指導で折り紙をし，クラスを上手に運営するのは少々難しいかもしれないという。

学生の実習の経験談によると，年長児は遊べる折り紙（例えば，紙飛行機や手裏剣，紙鉄砲など）を作ると友達とのかかわりやコミュニケーションが発達しているので，お互いに教えあったり，一緒に作品で遊んだりして，エキサイトしながらもとても楽しそうに遊ぶそうである。

もっともその学生も，初めての幼稚園実習では，「犬の顔」を折り紙で作ろうとし，年中児のク

ラスで実際に指導をしてみると，「半分に折って折目をつけて戻す」とか，「今度は紙を裏返しにしてね」といった簡単な作業でも，説明の仕方が下手なのか，ちょっとした指導の仕方ひとつで，子どもたちが全く理解を示さない場合があるので，指導の難しさを身にしみて感じたとの話であった。幼稚園の指導教師からは，初めての実習だし，上手にできないのがあたりまえであって，実習生だから，上手にできなかったことや失敗したことも全て勉強だといわれ，くよくよしないで頑張るようにと励まされたそうである。

それから，折り紙の指導については，子どもたちの年齢の違いによっても，興味･関心度や理解力の差によっても大きく折ることのできる作品の種類も違ってくるし，同じクラスでも子どもたちに上手・下手の差もあるので，一律に指導するのは難しい。子どもたちが折り紙を楽しみながら，上手に折れるようにするのには子どもが分かりやすい言葉を選んでの説明や，見本の折り紙への工夫，声かけの方法など，考えなければならない点が多々あるとのことである。

例えば，指導用の折り紙には大きなサイズの用紙を使うこともひとつの方法だし，見本を分かりやすくするために，折すじに線を引いておき，折り合わせる面には丸や三角などの記号を描いて説明する方法もあるし，完成までの折り順を段階ごとに折った折り紙を見本としていくつか並べておく方法などもある。また，年少クラスの子どもや作業が大きく遅れている子どもには，直接，子どもの手をとって折る場合もあるとのことであった。

このように子どもの年齢や理解力による違い，個々の子どもたちの特性に合わせた指導は，一朝一夕には身につくものではなく，長年の指導経験のなかから自然に身についてくるものだという。

Ⅶ　おわりに

折り紙は日本に昔から伝わる伝統的な遊びのひとつであるが，現在では海外でも origami として一般的に知られるようになった。折り紙が最も遊びとしても教育の手段としても利用されるところは幼稚園や保育園においてであろう。

なぜ幼児教育において利用されているのかというと，折り紙の幼児に与える効用はもちろんだが，日本最初の官立幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園がフレーベルの幼児教育を取り入れ，恩物などを幼稚園の教育遊具として用いたことが大きい。フレーベルの第18番恩物は折り紙のことであって，当時は「摺紙（しょうし)」とか「紙たたみ」と訳があてられていた。折り紙は手技とみなされていて，その目的は目と手の練習であり，心身の発育に資することであった。

折り紙は，日本の幼児教育の初めから必要不可欠な教具として備えられたものであった。フレーベルの直弟子である松野クララが附属幼稚園の首席保母として，折り紙を教具として取り入れたことは分かっているが，実際どのように扱ったのかは不明である。『保育法』に描かれた恩物の図によると第18恩物として折鶴の絵が描かれているので，鶴などを折っていたのかもしれない。

最も現在の折り紙，正方形で半面に色彩が施してあるのは，日本古来の折り紙ではなくフレーベルの考案した折り紙なのである。

折り紙を幼児教育に取り入れることは，現在の保育所保育指針や幼稚園教育要領の唱えている保育にも適っているといえる。折り紙には，子どもが自発的に，そして意欲的に取り組み，子どもたちがお互いに教えあったりし，コミュニケーションを発達させながら友達関係を広げ，深めていく環境が備わっていると考えられるからである

折り紙の効用については，一般的に言われていることだが，細かい作業なので自然と集中力が上がることや，人の話をよく聞くことによって理解力が付くこと，折り紙をいろいろなものにみたてる想像力や創造力が育まれること，手先の操作力（巧緻性）が高まること，友達同士が教えあうことにより人間関係が広がり，深まること，さらには，積極性や自発性，長い時間折り紙に取り組むことによる努力する心，忍耐する心などが挙げられる。

折り紙の指導について，附属幼稚園の場合，取り入れる回数は年少，年中，年長クラスとも月に1回から3回ほどで，頻度的には，あまり多いとはいえなかった。折り紙の作品については，季節感を表すものや行事に合わせた作品が中心となっており，年齢が上がるにつれ，種類も増え，複雑なものを折れるようになっていることがわかる。折ることのできる種類としては5種類から15種類ほどであり，個人差が大きいことが明らかとなった。

指導方法に関しては，年齢によっても違うのだが，丁寧に指導すること，子どものペースに合わせて焦らずに進めること，説明には子どもに分かりやすい言葉を選んで話すこと，そして，一回ずつ折った形を何かにみたて，形の変化を楽しみながら進めることなどを挙げていた。指導用の折り紙の用紙サイズについては，年少は普通の折り紙ではなく大きいサイズの折り紙を使い，年中，年長クラスでは難易度の高い作品を折る場合にのみ，大きいサイズを用いるとのことであった。

実習での折り紙は，学生からの話であるが，前もって練習を十分にしているのにも関わらず，子どもたちの前で折り紙の指導をすると，簡単な作業の説明でも全く理解してもらえなかったり，子どもたちの作業ペースは個人差が大きく，できない子を直接指導していると時間が足りなくなったりで，失敗してしまったということである。

実習で習った折り紙指導のポイントは，指導する際に使う折り紙は子どもが見やすいように大きいサイズの折り紙を使うこと，折りかたの説明については子どもに分かりやすい言葉を使うこと，どのような説明をすれば子どもが理解しやすくなるのか前もって考えておくこと，折り紙で何を作るかは発達段階を考えて選ぶこと，アイロンをかけて折り筋をしっかりと付けること，順序別に折った折り紙の作品を見本として子どもたちの周りに置いておくこと，指導用の折り紙には折りすじをペンで描いておいたり，折り面には記号で印をつけておき，理解しやすいようにすることなどであった。

そのほか，折り紙の指導の面白い話題としては，子どもたちが意欲を持って折り紙に取り組むように，教師が「すごーく難しいから，よーく見ていてね」と声かけを子どもたちにしてみせるが，実はとても簡単な折り方だったりすると，子どもたちは「なーんだ簡単じゃーん」といって，自信を持って折り紙を折り始めるようになることなどである。

今回は，幼児教育における折り紙の意義と附属幼稚園の指導のあり方を中心にして論述したが，附属幼稚園で折り紙の指導は月に１回からせいぜい３回ほどで，頻度的には多いとはいえないだろう。子どもたちが折る折り紙にしても，教師の援助がどれほど必要なのかも明確でなかったし，１回の折り紙の時間の長さがどれほどであるのかも研究対象に入っていなかった。こうして論述しているうちに気付いたことでもあるが，子どもが折ることのできる折り紙の種類は，よほど折り紙を重点的に保育に取り入れていなければ，いくつぐらいと数えることは難しいであろうし，それ以前に折り紙を幼児教育に本格的に取り入れている園は，附属幼稚園に限らず少ないのかもしれない。

今後の課題としては，折り紙を子どもたちが折っている場面を実際に観察して，①どんなものを折っているとき，割合的にどれくらいの子どもたちが，教師の援助なしで折れるのかや，②子どもたちの教え合いはどんな具合で行われているのか。③自発的に折ろうとする折り紙はどんな作品なのか，④全く教師の援助なしで折れる作品はいくつぐらいあるのか，⑤折り紙の本だけを見て折れるのか，そして，⑥見本があれば折れるのかなど，の６項目を挙げたい。

参考文献

１．文部科学省（平成17年）『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）』
http://www.mext.go.jp/b－menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm

２．文部科学省（平成20年）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

３．文部科学省･厚生労働省（2008）『幼稚園教育要領･保育所保育指針』チャイルド本社

４．山口真（2009）おりがみようちえん　西東社

５．筑地制作所（2008）『３歳からのはじめての折り紙遊び』PHP研究所

６．中村五六（明治39年）「保育法」『明治保育文献集　第八巻』（昭和52年）日本らいぶらり

７．岡田正明　他（1997）『現代保育用語辞典』フレーベル館